

卓越セミナー第10回
(コンフリクトの人文科学セミナー第94回)

映像制作における 異文化理解とその表象

2/28日(金) 15:00~

【会場】大阪大学吹田キャンパス
人間科学研究科 東館106

予約不要・参加無料

講師：市岡康子氏

15:00~17:00

「映像制作における異文化理解とその表象」
(『ギサロ 悲しみと火傷』上映)

17:20~19:00

『ギサロ』関連作品の上映とディスカッション

[お問い合わせ] 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」事務局
Tel: 06-6879-8085(人間科学研究科・人類学研究室)

卓越セミナー第10回
(コンフリクトの人文科学セミナー第94回)
映像制作における
異文化理解とその表象

2/28(金)
15:00開始

予約不要
参加無料

【講師】 市岡康子氏 (テレビプロデューサー/ディレクター)

【要旨】

パプアニューギニアの深奥部に広がる大パプア台地に暮らすカルリの儀礼ギサロを主題としたテレビ番組制作の実際から、制作者自身の異文化の理解とその表象に至るプロセスを提示する。

ギサロとは「歌」という意味だが、儀礼としてのギサロは歌と悲しみの相互交換といえるだろう。ふたつのロングハウス共同体の間で行われ、訪問側は4人の踊り手とコーラス団を率いてやってくる。儀礼が始まると踊り手が1人ずつ立って歌い始める。メロディーは一定だが、歌詞はその都度書き換えられ、相手の村の生活圏にある地名、大木の名前などがちりばめられている。聴くほうには、それらのなじみの場所にまつわる思い出(亡き父母のいつも働いていた場所など)に触発され涙を流す者がでる。この時踊り手は賞賛されるが、泣かせた相手にタイマツで背中を焼かれる責めに耐えねばならない。

予備知識のない一般視聴者には野蛮とか残酷と取られがちな儀礼の底に流れる意味をどのように把握したかを、制作の時間軸に沿って体験してほしい。

【日時】 2014年2月28日(金)

15:00～17:00 「映像制作における異文化理解とその表象」

『ギサロ—悲しみと火傷』(1987年「すばらしい世界旅行」)の制作過程にもとづき議論する。

17:20～19:00 「開発への渴望」

『ギサロ』関連作品を紹介し、開発援助のありかたを考える。

【会場】 大阪大学吹田キャンパス 人間科学研究科 東館106教室

【講師プロフィール】

元立命館アジア太平洋大学教授。1962年に日本テレビに入社し、「ノンフィクション劇場」「すばらしい世界旅行」などのドキュメンタリー番組の制作を担当。1972年、制作会社日本映像記録センターの設立に参加。アジア太平洋地域を専門に多数の番組を制作し、各地の人びとの生活と文化を克明に描いた。2001年から6年間、立命館アジア太平洋大学でフィールドワークに基づいた映像制作のゼミを担当。大阪大学GCOE「コンフリクトの人文科学」(2007-2011)では文化人類学の研究成果に基づく映像作品の制作を指導し、2作品を完成に導いた。著書に『KULA—貝の首飾りを探して南海をゆく』(2005年、コモンズ)などがある。

第1部

映像制作における異文化理解とその表象

「すばらしい世界旅行」シリーズ「ギサロ——悲しみと火傷」の場合

みなさん、こんにちは。市岡です。

人前で話すのは2年ぶりですので、少し心配しているのですが、まず私の立ち位置を明らかにして始めようと思います。ここにお集まりのみなさんのほとんどは、文化人類学やその関連の学問研究をされている方たちだと思います。私はそういう立場ではなくて、テレビを見る日本のごく一般の人びとに対して、異文化に住んでいる人たちの生活のスタイルとか、どんなことを喜びとして暮らしているかとか、いってみればそうした人たちの価値観をできるだけわかりやすく紹介するという番組を作っていたわけです。ですから対象にする相手が、みなさんのような人たちとは違うということがまずあります。なにしろ、日曜夜のプライムタイムに放送する番組で、視聴率というものを信用するならば、いちばん多いときには1千万人が、少ないときでも数百万人が見る番組ですから、どうしても作り方や説明の仕方が、みなさんが作る学術的な映像とはまったく違うだろうと思います。

今日お見せする作品は、異文化の人たちの生活や価値意識を紹介するという目的のなかで、提出の仕方について非常に迷った部分が多いものでした。これをひとつの例として、お話しをしたいと思います。

映像に登場するのは、パプアニューギニアの心臓部に住んでいるカルリ族という人たちです。ボサビ山という山があり、そのあたりが大樹海になっています。富士山の樹海の50倍もあるような大樹海のなかに、彼らは住んでいます。主に3つの言語グループ、カルリ（Kaluli）、オナバスル（Onabasuru）、エトロ（Etoro）があります。パプアニューギニアには正確なセンサスがないのであくまでも推定人口ですけど、私が最初に行った1985年ごろで、カルリが2000人、オナバスルが800人、エトロが1200人という人口構成でした。撮影したのは、カルリ族です。

このあたりの大まかな歴史を説明しましょう。外界とコンスタントに接触するようになったのは1964年からです。それ以前に、オーストラリアの探検隊が通過したことはありましたが、恒常的に外界と接触するようになったのは、これ以降です。米国のプロテスタントの宣教団アジア・パシフィック・クリスチャン・ミッションの人たちが、樹海のなかに滑走路をつくりました。滑走路の付近には、非常に初歩的なものですが、ミッションの基地をつくり、米国人の宣教師夫妻が駐在するようになりました。ちょっとした小学校と、エイド・ポスト（救護所）もあるような基地をつくったんです。でも、カルリ族の人たちはそのあたりだけに住んでいたわけではなくて、非常に広い範囲に散らばって、いくつものコミュニティがありました。基地のすぐそばに住んでいる人たちは小学校に行ったかも

しませんが、ほとんどの人は、小学校や救護所の恩恵にはあまり浴してはいませんでした。滑走路もミッション用ですから、飛行機は定期便が飛んでいたわけではなく、小さな6人乗りのセスナがときどき到着する程度でした。地元の人たちの交通路とは考えられなかったと思います。

パプアニューギニアは、1975年に独立しました。独立をはさんで、この地域はほとんど何も変わりませんでした。1984年に、政府によって第2の滑走路が作られました。私をはじめ訪れたのは、その1年後ということになります。しばらく後の話になりますが、1992年には、州政府の出先行政官 ADC (Assistant District Commissioner) が駐在するようになり、政府立のコミュニティ・スクールができて、滑走路のそばに救護所も立ちます。私が最初に行ったときは、まだそういうものは何もありませんでした。

私がこのカルリ族のギサロという儀礼について知ったのは、1冊の本、アメリカの人類学者エドワード・シーフェリンが書いた“*The Sorrow of the Lonely and Burning of the Dancers*”からです¹。私は1970年代には、かなり足しげくパプアニューギニアを取材していました。けれど79年ごろを最後に、イリヤンジャヤとか、中国とか、ほかの地域で取材をするようになって、パプアニューギニアに行く機会がなくなりました。ですから、8年ぶりくらいに帰っていったわけです。

このとき、また新しい立場で題材を発見しなければなりません。そこでまず、シドニーに行って、本屋でパプアニューギニア関連の本を探したわけです。そのときにちょうどセールをやっている状態で、本が山のように積んでありました。そこから、とにかくパプアニューギニアに関するものを片っ端から抜いて、買ったわけです。6、7冊あったと思います。その本をホテルに持って帰り、最初に手にとったのがこれなんですね。たぶん、表紙の絵に惹かれたんでしょう。それからソフトカバーで、読みやすそうに見えました。

読み始めると、はじめに16頁ほどのイントロダクションがあるのですが、それを読んだだけで、ものすごく心を惹かれてしまいました。ぜったいここに行きたい、ここに記述されている儀礼をぜひとも映像にしたいって、非常に強いやる気を起こさせる本でした。

まず、パプアニューギニアに1人で出かけました。撮影許可をとらないといけないのですが、パプアニューギニアの撮影許可は、けっこう難しいんです。まず中央の役所に取材申請を出す。もちろん中央からの許可が必要ですが、中央だけでは結論を出しません。撮影をしたいといっているその地元、この場合はサザンハイランド州ですが、そこに「こういう依頼が来ているけれど、君たちは受け入れるか」って照会するわけです。州にはだいたいリサーチコミッティというのがあって、そこで可否が審査されます。ですが放っておいたら、いつまでたっても返事が来ないというのが、それまでの経験でわかっていました。だから、まず中央に申請したら、すぐにサザンハイランド州の中心地メンディに行って、

¹ Schieffelin, E. L. (1976): *The Sorrow of the Lonely and the Burning of the Dancers*, St. Martin's Press, New York.

そこでリサーチコミッティを率いている人物に直接会って説明をして、許可をしてください、できるだけ早く中央に返事を送ってくださいと促す。これが作業の第一弾になるわけです。

もちろん、そのとき同時に、カルリ族が住んでいる地域について、ダイレクトな情報を取ろうとしました。本を読んである程度のことはわかるけれども、トランスポーターがどうなのか、山の上で自分たちが仕事をするときに通訳をしてくれる人がいるのか、撮影中はどういうところに住んだらいいのか。撮影班が行ってそこに定着するには、いろんな条件がありますから、そういうことを調べました。

ただ、このときには山の上までは行きませんでした。なぜかという、飛行機をチャーターしなければ行けない、非常に行きにくいところでした。行って、飛行機が帰っちゃうと、完全に孤絶するわけですね。いつ帰れるかわからない恐怖を感じる場所だし、1人で行って飛行機をチャーターして、帰りのぶんまでブッキングしてということは、経済的にもできませんでした。

ですが幸運なことに、ボサビ地域を選挙地盤にしている地方議会の議員であるハリ・カレさんに、メンディで会うことができました。この人はカルリではなく、オナバスルの人ですが、でも地域の全体をカバーしているわけです。彼は、伝統的なものに対する意識が高い人でした。ミッションが入ってきて、精神的な部分がある意味で壊れていってしまう。アメリカのプロテスタントだから、カトリックよりもずっと、そういう進み方が早いわけです。彼は、そういうことに多少の義憤を感じていた。「いろいろなものが失われたけれど、ギサロはまだやっている。君たちが映像に残すことは、自分たちのためにもなるからいいことだと思う、だからなんでも協力しよう」と言ってくれたわけです。それは、私にとって大きな力になりました。

日本に帰ると、今度は東京から電話で、ポートモレスビーの中央と州のリサーチコミッティを率いている人に、何度もせつづきました。やっと次の年の5月に撮影許可が出て、撮影に入れることになりました。

1985年夏にパプアニューギニアに行き、ギサロの前にふたつの撮影をしました。サザンハイランド州のフリ族、それからエンガ州のエンガ族のそれぞれ別の作品を撮りあげて、ギサロはいちばん最後にやりました。カルリの暮らしている場所は非常に行きにくくて、途中で何が起こるかわからないから、日程の間に入れずに最後に回したんですね。

いよいよ飛行機をチャーターして乗り込みました。7月中旬から20日間くらい山の上に滞在しました。このうち1週間は、予約していた帰りの飛行機が来なくて、滑走路に行つては待つという毎日でした。ですから実際にロケをしたのは、13日間ということになります。

私たちのターゲットは、ギサロでした。前年に、県会議員のハリ・カレさんにお話ししていたので、力になってもらいました。彼がギサロを組織してくれました。ギサロは年中

やっているわけではなくて、本によれば、たとえば結婚のとき、食べ物の大掛かりな分配がある。そういう機会の夜に、アトラクションとして行われたりします。後で聞いたところでは、独立記念日の9月15日にもやるそうです。それから、クリスマスから年始にやることもあると、地元の人たちは言っていました。けども年中やっているわけではない。このときは、ハリ・カレさんによって組織されたギサロを撮影したわけです。

ではまず、ギサロそのものの映像をお見せします。今回は、私たちが現地で仕事をした順番どおりに映像をお見せします。それをみなさん自身に経験してほしいと思います。はじめは、ギサロの儀礼だけを見ていただきます。みなさん、自分が人類学の学徒だと思わないで、一般の視聴者になったつもりで見てください。茶の間に突然こういう映像が出てきてそれを見たとして、どんなふうを感じるかなあと、そんなことを考えて見てください。

【映像上映】 ギサロの儀礼前半

これは余談ですけど、いまの場面でBGMがかなり華々しく出てきました。こういう場所で上映すると、音楽のことを必ず批判されてきました。私は実は、この音楽はかなり違和感があつていやなんです。あとで英語版をつくったときには、一切BGMを排除して、現地でとった音だけで構成しました。私はもちろん、そちらのほうが好きです。この作品は、音がよくとれていたこともあって、現地の音だけで構成して作ってみて、とても効果がありました。

さて、いかがだったでしょうか。人類学者だったら平気だろうとは思いますが、当時、私は現地から帰ってきて、編集して、かなりできた段階で、はてなと思いたんです。これをいきなり見せられたら、なんだかすごいことをやっつて、「痛そうだな」とか「残酷なんじゃない」とか、一般の視聴者は思うんじゃないかって、だんだん心配になってきたんです。

それにこの場面からは、私が現場でカルリの人たちとつきあって受けていた感じが、ちっとも出てこないんです。実際はほんとにやさしい人たちなんですね。個人個人がやさしい人っていうよりも、なんだか集団全体がやさしい人たちの集まりっていう、ほんとに心がやすらぐような相手だった。それなのにこの場面だけ出すと、ものすごく誤解されちゃうんじゃないかと思ったんですね。ある意味では異文化理解を促進しようとしてやっていることなのに、これじゃあ異文化誤解になっちゃうんじゃないのかと、強く疑問に思いました。

もうひとつは、歌詞を翻訳していくうちに、「わたしはひもじい」って言葉がいっぱい出てくるんですね。もとは英語で訳されますから、「I am hungry」となるわけですけど、これがいくつも出てくる。これになにか大事な意味があるんじゃないかと考えて、それを突き詰めたいとも思いました。それでプロデューサーに、これをちょっとお蔵にしてもらいたい、もう1回追加撮影をさせてもらえないかと相談しました。それがOKになって、途

中まで編集した映像は、そのままできてしまったんです。

追加撮影のためだけにパプアニューギニアに行くわけにはいかないので、次の年は、ほかの素材を見つけて、そこでちゃんと1エピソードをつくって、そのあとにまたカルリのところに行くという段取りをつけました。このときには、10日か11日くらいしか滞在していません。ギサロは十分撮れたから、カルリ族の日常生活を中心に撮ることに専念したんですね。

では次は、カルリ族の日常生活の場面を見ていただきたいと思います。

【映像上映】 カルリ族の森での生活

日常生活の場面をご覧くださいました。カルリ族が醸し出す雰囲気とか、気質みたいなものが、みなさんにも感じていただけたのではと思います。2年目の撮影では、例えば、樹木の大きさを見せながら、「その木には誰その霊が宿っている」というようなカルリ族からの解説を撮ったりしました。

他には、オオハナインコを呼ぶシーンですね。オオハナインコそのものや、極楽鳥が集まって求愛のダンスをしている様子など自然の状況そのものは、前年に撮っています。めずらしいですし、美しい自然を表現しています。動物のシーンというのはその瞬間にしか撮れないので、一生懸命になって撮りました。だから、鳥そのものの姿はもう撮れていたわけですね。その撮影をしたときも、木の下で人が呼んでいるからオオハナインコが出てくるわけですが、そのときは呼んでいる人たちにあまり注意が行ってなかった。人間とオオハナインコという関係性を表現することも、彼らと環境との関係を表すのに、とても意味のあることだと思いました。それで2年目は、もう鳥は撮ってあるわけですから、鳥を呼んでいる人たちばかりを一生懸命撮ったんですね。

ちょうど1年後だったんですけど、あの木の洞には、オオハナインコはもういませんでした。手をたたいて、木にズームアップしていくんですが、本当はそこにはオオハナインコはもういないんです。途中から切り替えています。でもそれも、まったくのうそではないから許してもらうことにして、そういうかたちにしました。

極楽鳥にしても、前の年は鳥そのものは撮っていました。だから2年目は、木の下にみんなが行って、鳥を探したり、どういうふうに人が接しているから鳥が逃げないんだよとか話をするとところを撮りました。その両者をひとつに合わせて、人間と鳥との関係を表現するようなシーンにしたわけです。

2年目の日常生活のなかで、わたしがいちばん収穫が多かったのは、ネグビさん一家の出作り小屋へ、何日間か撮影に行ったことなんですね。ロングハウスというのは、7家族ぜんぶが、いつもそこに住んでいるわけではありません。それぞれの家族は、自分が権利をもっているサゴ林などのそばに出作り小屋があって、週のうち5日間は家じゅうでそこに行っていて、仕事をしています。週末になると、ロングハウスに帰ってくる。クリスチャンが多い

ので、教会に行くために帰ってくる人たちもいるわけです。村の集会やロングハウスでやる行事の多くは、皆が帰ってくる土曜か日曜に行われます。ですから、ふだんはロングハウスに行っても、ほとんど人がいないんですね。こっちにしてみれば、仕事にならない。

そういうわけで、日常の仕事ぶりを見るには出作り小屋に行くしかない。私たちはネグビさんに、あなたのところで撮らせてくださいって頼んで、行くことにしました。小屋は、歩いて2時間くらいかかるところにあります。山道で、途中ヒルがいっぱい出たりもするし、毎日4時間歩いて往復するのはたいへんなので、泊まりがけで行くことにしました。1、2泊するだけなのに、私たち現代人の生活はほんと不便で、いろんなものを持っていかなきゃならない。そのために、ポーターを雇わなければならない。まず撮影するための機材です。これはビデオ撮影をしています、3/4インチの新しいビデオカセットをたくさんもっていく。機械を動かすためには、バッテリーを毎晩チャージしないといけない。チャージするには電気が要りますが、電気はロングハウスにも、出作り小屋にももちろんない。だからポータブルの300Wの発電機をもって行きます。これが20kgくらいの重さがあります。さらに、それを動かすためにガソリンがいる。それ以外にも、自分たちの食べ物と、ちょっとした着替えと、洗面器とか石鹸とか日常の生活の道具もいる。そうすると、最低5人くらいのポーターが必要になります。さらに、もしその5人の食料ももっていくとすると、5人分を運ぶのに2.5人が必要で、その2.5人分を運ぶのにまた1.25人が必要になって、全部で10人が必要になっちゃうんですね。10人のポーターを引き連れて2泊の撮影に行くなんて、いかにも物々しい。それに10人も雇おうにも、みんなそれぞれ忙しいので、けっこうむずかしい。

それでネグビさんに頼んで、一緒に来るポーターたちの食事を出してもらえますかって聞いたら、喜んでやると引き受けてくれました。「みんな自分の仲間だし、そんなこと全然心配しないで来なさい」って言ってくれたので、5人のポーターと行けることになりました。

撮影は、サゴ澱粉を取りにいくような場所もみんな傾斜地で、身動きするだけでものすごく疲れるんです。私はとくに山に弱くて、その日の撮影が終わるとへとへとになってしまう。夕方早々には、自分でご飯をつくって食べなきゃならない。食事をして、7時半くらいには横になっていたんです。出作り小屋の外に、ちょっとしたベランダがあって、上には屋根が張り出していて、そこに寝ることになりました。横になっていると、隙間だらけの壁から、中にいる人たちのすっごくにぎやかな声が聞こえてくる。ネグビさん一家と、5人のポーターがみんな集まって、何かやってるわけですね。助手の若い青年が、中に入ってそれを見物してきたんです。

私たちはそのとき、ポーターに食事を出してくれるというので、それに対するお礼と、撮影させてくれることのお礼のつもりで、お米とか砂糖とかティーバッグとか、乾パンの親分みたいな大きなビスケットとか、缶詰とかを、まとまった量で差し上げていたんですね。そしたら中から戻ってきた青年がいうには、「さっきあげたものを全部だして、いろんな料理にしてみんなに振る舞っている」っていうわけ。私は、少しは取ってあるんじゃない

いのって言ったら、「そうじゃない、ぜんぶ出してます」って。

それを聞いて私は、すごく感動しました。差し上げたものは、彼らにとっては非常に貴重なものなんですね。お金を出さないと買えないけどお金はないし、トレードストアにもそも揃ってもない。なかなか手に入らない、ほんとに貴重品なんですね。それをまとめてもらったのに、全部を分配しているという、その心意気というか、これにほとんど感心したんです。私だったら三分の一くらいは取っておくのにと思うと、恥ずかしくなるくらい。そこで、食べ物を分配するというのが、彼らにとってものすごく大事だということが、ひしひしとわかったわけです。

ご覧いただいた映像のなかに、一家が川のそばで魚をとって、サゴ澱粉のなかに入れて焼いて、みんなに配っているところがありましたよね。あのシーンは、この出来事のあとで撮りました。私はあのシーンを、この作品のなかでいちばん大事なシーンだと思うんです。べつにぜんぜん、スペクタクルでもなんでもないシーンです。ギサロなんかのほうが、もちろん魅力は大きい。けれども、意味としてはすごく大事なシーンなんです。しかも、ビデオ撮影だからこうなったのですけど、カットを割っていないでしょう。その場にいるすべての人に、食べ物を配る。お母さんに、お父さんにと配っていくんですけど、フィルムだとカットを切っちゃうんですね。でもあれはビデオだから、ずーっとワンカットで撮ってあって、食べ物をみんなに配る流れがよく表現されている。べつにすばらしい、ぞくぞくするようなカットではないんだけど、でも意味としてはとっても重要なシーンだと思っています。そういう大事なシーンを、自分で「キイ・シーン」と呼んでるんですが、あれはそういうものになったと思うんです。

ご覧になると、彼らの住んでいる環境と、人々の気持ちと、人々の生活が、一致しているという感じをお受けになったのではないかなと思うんですね。ギサロの儀礼で彼らが歌っている歌の意味は、地名の羅列だから、日本人にとってぴんと来ない歌詞ですね。でもそういうことがわかってよく見ると、その歌がとても意味のある、彼らにとってすごく大切なことを歌っているのだなということが、はじめてわかると思います。

日本文学の研究者で工藤隆さんという方がいらっしゃるんですが、この番組を見たということのをちにペーパーに書いていました。この方は、記紀歌謡、万葉集の歌を研究しているんですが、そういう歌のなかに、ほんとに地名の羅列としか思えないような歌がいくつもあるんですって。それまで彼は、それをどう解釈したらいいかわからなかったそうです。それがこのギサロの作品を見て、なんだか腑に落ちたと書かれていました。古代の日本人も、カルリの人たちと似たような、土地に対する感覚、土地に密着している気持ちというのがあったんでしょう。その当時の日本人は、限られた範囲の土地に住んで、あちこちに行くわけにもいかない。ひとつひとつの土地に対する密着度があって、カルリの人たちと同じような感覚を、土地の名称に対してもっていたんじゃないか。だから地名を羅列するだけで、ある種の情趣が醸し出されるということがあったんじゃないか。ギサロの作品を見てそう思うようになったと、彼は言っていました。だからきっと、古代の日本人に

も、そうした土地に対する気持ちがあったんですよ。

日常の映像を見ていただいたあとに、もう1回ギサロを見ていただくと、見方が変わるかなと思います。それではもう1回、後半の部分のギサロを見ていただきます。

【映像】 ギサロの儀礼後半

どうでしょう。私はもう何十回も見ているので、そういう変化は感じられないですけど、みなさんの見方は何か変わったかしら。どなたか、感想があればぜひお聞かせください。

【質疑応答】

内海博文（追手門学院大学）： 質問ですが、作品に使われている音楽について、そんなにあちこちで批判されるのですか？

市岡： 言われます。クラが入賞しなかったのは、西洋音楽のせいです。と、言われています（笑）。

内海： 一度目の撮影を行って、編集がすでにかなり進んでいたのに、仕上げを延期したというその判断は、とても面白いと思いました。きびしいスケジュールのなかで、どんどん作って流すという感じでは、その当時は必ずしもなかったのでしょうか。

市岡： 「その当時」というか、「そのプロデューサー」がそうだったといった方がいいかもしれません。そもそもこの手のシリーズでは、スケジュールどおりに予定を入れておいて、そのとおりにやるということはできなかったですね。

アマゾンに行って、音信不通になっちゃって、もう3週間後には放送予定が入っているってなったら、どうにもならないでしょ。だからだいたい牛山プロデューサー²は、たぶん間に合わないだろうっていう前提ですべてをやっていたんでしょう。もし間に合わなかったら、ほかの題材で埋めなきゃならないわけですね。その埋めるものを自分でいつも持っていてやるというくらいでないと、できなかったですね。

内海： 使われている文脈に照らして翻訳すると「ひもじい」となる言葉があって、これが何度も歌に出てくる。けれども、この「ひもじい」という翻訳が、ただ「ひもじい」だ

² 牛山純一（1930~1997）。「ノンフィクション劇場」「すばらしい世界旅行」などを手掛けた、日本を代表するテレビプロデューサー。

けでいいのかわからない。しかし、カギになる言葉ではないかと考えた。当時、この言葉がどういう意味なのかということは、市岡さんが1人で考えたのでしょうか。それとも、いろんな人と議論するなかで、その意味を理解するようになったのでしょうか。

研究者が、何年もかけて論文を書くのとは違いますよね。時間がたくさんあるわけではないなかで、撮影した映像を見ても、そのときの感覚をうまく表せていない、どう伝えたらいいかわからないという問題がある。そうした状況で、どうやって意味を探って、確定する作業をしていたのでしょうか。

市岡： 「ひもじい」という言葉は、訳しているときにもたくさん出ていたはずですが。けれども、山の上でどんどん訳しているときは、どんどん先に進めていっちゃうんです。編集になると、少しは考えながら改めて見直すようになって、それで「ひもじい」に注目したんです。

次の年に撮影にいったときに、翻訳してくれている人に、「しょっちゅう『ひもじい』って出てくるけれど、これは『おなかがすいた』って意味なのか」って聞いたら、「そうじゃない」って言うんです。「じゃあそれは、なにか『さみしい』とか、『ものたりない』とかって意味なんですか」って聞いたら、「そうだ」って言うわけ。それで、孤独感ということに結び付きました。だから、誰かと議論したのではなくて、ほとんど私の直感みたいなものではないか。みなさんのように、同じ研究者とのあいだで、議論して膨らませて、正しい答えに到達していくというようなプロセスは、われわれにはあまりないんです。

中川敏（大阪大学）： わたし自身の感想ではなくて、日曜日の7時半にこの番組を放送しての、これに対する視聴者の感想についての質問です。当時、そうしたものは手元に入ってきたのでしょうか。

市岡： いえ、そのころは入ってきませんでしたね。そういう視聴者のレポートをとっている部署はありますが、それは同じシリーズを毎回はやらないんです。アトランダムに、いろんな番組の視聴者の反応を調べているので、たまたま調査対象になっていないと、わからないんです。

中川： では、比較もできないのです。興味があつて知りたかったのは、たとえばジャワの農村とか、日本とあまり変わらないようなものを見たときと、先ほどの「残酷だ」と思われかねない、ずいぶん違ったものを見たときとは、反応に何か違いがあったのかなと思いました。

ちなみに、視聴率はいかがだったのでしょうか。見慣れたものだと数字が低くて、ちょっと変わったものだと視聴率が高いとかいった傾向に気づいたということはありませんか。あるいは、気にもしていなかったとか。

市岡： この回の視聴率がどのくらいだったかは、あまり覚えていないですけど。特によくもなかったし、特にわるくもなかったような気がします。

もちろん「珍奇なもの」は一般の人の興味をひく場合が多いから、ごく平凡なものよりは、珍奇なものの方が視聴率が上がるのは、たしかです。

中川： たとえ「残酷だな」と思われるものでも、あがるものですか。

市岡： そうですね。これは人間のことをやっていますが、「自然シリーズ」という動物を扱っているものもあったんですね。そこでは、グロテスクっていうのかな、蛇だとかちよっとこわそうなものをやる方が、視聴率はむしろ上がりました。

中川： 日曜日の7時半でも、そのほうが視聴率が上がるんですね。

テクニカルなことについて別の質問ですが、ビデオをもっていかれて、翻訳をすぐその場でされたという話ですが、フィルムを使っていたときは、翻訳はどうやっていたのでしょうか。「クラ」の撮影のときは、フィルムですよ。

市岡： 「クラ」のときは、フィルムとサウンドテープを別にとりました。サウンドテープを何回も回して、翻訳をします。だから、翻訳しているときは絵は見えないので、ときどき困るんですね。どの部分なのかわからないから、勘を鋭くしないと。

中川： では、ビデオは大きな進歩だったのですか。

市岡： そういうことをやるには、やりやすかったです。ただビデオも、翻訳をやるには、何度も戻したり再生したりをマスターのビデオでやっていると、傷がついちゃうんですね。ですからそれも、いっぺんサウンドテープに落として、翻訳は結局それでやっていました。

質問者 1: 魚を毒でとらえていましたが、その魚を食べても影響はとくにないのでしょうか。あと、とった魚の調理法にはどういったものがあるのでしょうか。

市岡： アルカロイドは魚を殺すのではなく、ふらふらにさせて、アクションを遅くさせます。専門家に確かめたわけではないですが、あの魚を食べたからって人間に毒にはならないと思います。調理方法は、小さい魚だったらサゴ澱粉といっしょに蒸し焼きにしますし、ごく大きい魚なら、焼いて食べたりもします。

質問者 1: 煮込み料理なんてありますか？

市岡： あまり複雑な料理はしないですね。あそこでいちばん美味なのは、ザリガニでした。ザリガニを竹筒のなかに入れて、竹筒ごと焼くんです。蒸し焼きになるわけですが、これはもう最高の、オマールエビの料理みたいになりますよ。

宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所）： 私は、これをオンエア当時に見ているんです。いま見ていると、どこで思い出したかというところ、サゴ椰子から澱粉をとるところと、毒で魚をしびれさせるところのふたつでした。実をいうと、メインであるギサロの場面は全然覚えていませんでした。24、5歳のころです。

なんでメインの場面は記憶していないのに、そういうところを覚えているのか。こういう番組は、自分たちとの差異をクローズアップすることが多いのではないかと思います。一方、共通の部分をあまり取り上げない。でもそうすると、見る側はリアリティを感じられなくなるのではと思います。だから、共通の部分を見せてもらって、その後に差異の部分を見せてもらうといいですが、差異の部分を先に見せられても、リアリティを感じられないのではと思います。

市岡： このお話を、1時間とか50分の番組でやるんだったら、日常生活とギサロを一緒にして編集ができるんです。英語版では、1本の作品のなかに生活もギサロもぜんぶ入っています。

でもこの番組の放送時間は、25分なんですね。だから2本に分けることになる。するとすべての人が2週にわたって必ず両方を見るわけではない。どちらかしか見てももらえないかもしれない。そこで、どういう2本にするかが問題になるわけです。このときは、1本目を日常生活にして、2本目はギサロにほとんどを集中しました。2本目でも、1本目で使っていない日常生活の場面を入れはしましたけど。だから、もしかしたら、2本目はご覧になっていないのかもしれないよ。

川瀬慈（国立民族学博物館）： 映像の前半の、踊り手にインタビューしているシーンについてです。市岡先生が英語で語りかけて、踊り手がある程度理解して一部英語で答えていた。そのときにこの踊り手が、「dancer」という言葉を発していましたが、そこに「歌手」という日本語字幕が当ててありました。これはどういう理由からでしょうか。もしかしたら、ここでは歌と踊りとが未分化であるからなのかと想像したのですが。

市岡： シーフエリンの本も、「Burning the Dancer」となっていますね。でも、あれを見ていると、たしかにダンスでもあるけど、日本人の感覚としては歌という印象の方が強くないですか？「踊り手」というと、視聴者には不自然な感じがするのではないかと思います。私は「ダンサー」を「歌手」と訳しています。私の方では、踊りよりも歌の方に意識

を集中して、歌の意味をすごく強調している。ただ、地元の方は「ダンサー」って言っていますね。

川瀬： 私の知人に、ジャズのトロンボーン奏者でもあるスティーブン・フェルドというアメリカ人の人類学者がいます。彼は、カルリの音世界の CD を複数出版しています。それを聞くと、森のなかに通奏低音のようにある虫の鳴き声や木々のざわめき、鳥のさまざまな鳴き声とかが、際立った輪郭をもってこちらに迫ってくる。番組のなかでは特にフィーチャーされてはいなかったけれども、それでもそういう音世界の豊かさが伝わってくるようで、感銘を受けました。

市岡： スティーブン・フェルドさんは、『*Sound and Sentiment*』、邦訳で『鳥になった少年』という本を出していますね³。映像の途中に、姉弟のやりとりで「ザリガニをくれないので弟が鳥になってしまった」という話が出てきましたが、これは彼の本から引用しました。

たしかに本当に、いろいろな音がすごくリッチなところです。たとえば、サゴヤシの澱粉を精製したりする森のなかですね。私たちはプロのサウンドマンを連れていないので、私か助手のどちらかが録音しているんですけど、それがなかなか、いい音がとれてきたんです。スタジオのミキサーが、「とてもよくとれている」と言っていました。森が一種のスタジオみたいな感じになって、音のこもり方っていうのか、とてもいい効果があったのではないかと言ってました。雑音があまりなくて、なんとも言えない、ふつうにただ音があるんじゃないかって、それがちょっとこもったような感じで取れていました。だから英語版を音楽なしでも作れたというところがあります。

ほんとうに鳥の声がすごくて、朝の4時半から5時になると鳥の声で目が覚めるという、それがアラームクロックのようでした。

司会（森田良成、大阪大学）： テクニカルな質問ですが、だいたい何人くらいのチームで撮影をされていたのですか。

市岡： 基本的には3人です。ディレクターとカメラマンと、学生アルバイトで、ちょっと英語ができるような助手に、なんでも屋の手伝いをしてもらう。ですから、技術的にはなんとかできるのは、ディレクターとカメラマンの2人しかいないんです。私はディレクターでしたが、録音はほとんどを自分でやりました。

放送時間の長いスペシャル番組は、制作費がよけいにあるので、ちゃんとしたサウンドマンを連れていきます。そうではない、「すばらしい世界旅行」のレギュラー番組は、ぜん

³ Feld, S. (1982): *Sound and Sentiment: Birds, Weeping, Poetic and Song in Kaluli Expression*, University of Pennsylvania Press.

ぶ自分で録音をやりました。フォトグラファーもやりますし、必要なときはライトを持つし。ほんとに、ミニマイズされたチームです。そのかわり、現地に長く滞在できます。

司会・森田： 僕が映像をつくるために先生にご指導いただいたとき、「これでは作れないから」と次の年に撮り直しに行ったことを思い出しながら、追加撮影の話を伺いました。25分の番組で、ある水準まで達していないと追加で撮影するということが、けっこう当たり前のようであったのでしょうか。

市岡： いえ、ありません。国内の取材であればできたでしょうけれど、外国でとなると費用がかかるので、めったにできません。牛山プロデューサーは、新人を育てるときに、まったくの素人で何もわかっていない状態なのに、いきなりぼーんと現場に放り込んで「とにかくやってこい」というんですね。そうすると、撮ってきたものはもちろんどうしようもないわけです。それで、さらにもう1回と、現場に送り込むということがありました。ただそれはフィリピンとかで、あんまり遠いところじゃないですよ。それをプロデューサーは、意図的にやっているんだと思う。

内海： 25分というのは、短いといえる時間ですよ。短くてやりにくいと思いますが、そのなかで見せるというのもまた腕の見せ所なのではないでしょうか。時間というのをどんなふう考えていたのでしょうか。

あと、本を読んで「どうしてもギサロを映像に撮りたい」と思ったというお話でした。それは、どういうところでそう思われたのか。実際に撮ってきて、もともと思っていたものが撮れたのか、それともまた違うものができあがったのか。

もうひとつ、ギサロ自体について質問です。こうして見ても、わからないところが多くて、儀式であると同時に、「泣かせてなんぼ」というある種の勝負ごとみたいにも思えました。楽しそうであるし、やけどをさせたくらい泣かせて、それだけ泣かせたらすばらしい歌だったとなる。盛り上がりすぎると、ストップがかかったりする。このギサロの儀礼そのものについてもうちょっとお聞かせください。

市岡： まず、25分という時間ですけど、これは決して短くありません。25分をちゃんと濃密に作るということは、けっこう大変で、ある題材では19分30秒しかできないのに、それを引き伸ばさなきゃならないということは、いくらでもあります。だから、長けりや長いほどいいってことではないんですね。

のちに、正味72、3分のスペシャルを何本か作ったことがあります。それを見ていると、自分で作ったものなのに60分くらいのところへきて、「え、まだあるの？」っていう感じなんですよ。「長すぎる」と私は思う。本当はもっと切りたい。だから私は、すごく長い作品は、あまり好きじゃないんです（笑）。それはほとんど人を拷問にかけるようなもんじ

やないかと思っちゃうんです。25分というのは、なかなかいい尺だと思います。

ギサロをなぜ撮りたいと思ったのか。それは、この本の表現力がよかったのかもしれない。なにか心臓をつかまれてぎゅーっと引っ張られてるっていう感じがして。映像にして効果があるかどうかは、ほとんど考えませんでした。とにかくすごいことをやっている人たちがいるんだなど。本を読んで、それをなんとか映像にしたいと思ったのは、マリノフスキーのクラと、このギサロだけです。なんともいえず、引きずられたというところがありますね。

出来上がったものについては、まあまあ、満足しています。もっとうすりゃよかったところ、そんなにはない。そういうのは、「クラ」の方がありますね。長さも、英語版で通しでやって43分くらいですから、そう長すぎないし、音楽を使わないでやれたのもうれしかったし（笑）。わたしは、自分が作ったたくさんの作品のなかで、3本の指に入る作品だと思っています。

それから、勝負ね。たしかにそういう部分はあると思いますけれど、ニューギニアの文化って、互酬性というものがものすごく強いじゃないですか。クラもそうですし、どこへ行っても互酬性なんですね。クラでは貝の装飾品ですけど、ハイランドに行くと、生きた豚をクランとクランのあいだでぐるぐる回していく。それのお返しを早くしろよって促すために、毎週着飾って、相手のクランのところまで500メートルくらい少しずつ進んでいくという踊りをやったり。そうした、互酬性のなかに互酬性があるみたいなのが、各地にあると思います。

私は、ギサロも一種の互酬性だと思います。いい歌を歌うということと、やけどをさせられることとの。たしかに歌合戦みたいなのがありますね。傍からはそう見えるけど、たぶん、ニューギニアの文化の根底にあるものの上に乗ったもので、ただ現れ方がとも変わっているものなんだと思っています。

武田和代（JICA）： 互酬性の話とも関係するのですが、撮影者として、コミュニティにどういうふうにして入って行ったのでしょうか。決して長い期間の滞在ではないので、その時間でどういうふうにして受け入れられていったのか。それと、もしかして第2部の話につながっていくのかもしれませんが、こうして撮影されたものを現地の人たちがご覧になったり、何かフィードバックをするような機会はあったのでしょうか。

市岡： ここの人たちって、あまり排他的でないということがまずあります。それによかったことは、ハリ・カレさんという県会議員がバックアップしてくれたことです。「彼がオーソライズしているんだったら、こいつらは大丈夫だろう」という気分が、カルリの人たちにあっただと思います。私が行って、ああいうものを自分で組織するなんてできないんです。ハリ・カレさんがやってくれたから、われわれが行って3日か4日後にはギサロが始まりました。それは大きな貢献をしてもらったと思います。

もうひとつ、これはお話ししていませんでしたが、1回目にボサビに行ったときに、山の上でシーフェリンに会ったんです。15、6歳の少年たちが集まってきて、荷物を運んだり、われわれの手伝いをあれこれしてくれるわけね。いろいろやっているうちに、「いまバックが来てるよ」って。「バック」っていうのが彼の通称なんです。それで「どこにいるの」って聞いたら、「あそこの村だ」っていうので、それじゃあ、すぐに会いに行かなきゃって、彼に会いに行ったんです。で、顔を合わせた瞬間に、「あなたの素晴らしい本が、われわれをここに導いた」って言いました（笑）。べつにおべんちゃらを言ったわけではなくって、私は本当にそう思っていたんです。

彼から情報ももらって、とても助かりました。私たちはぜんぜん知らないところに初めて行って、しかもカルリ族にはいくつも村があって、それぞれが離れている。撮影するには、自分が定着する根拠地を必ず作らなければならないのですが、事情がわからないから、それをどこにするのかですごく迷うわけです。

たとえば、北タイのアカ族のところに行ったときは、7つくらいの集落が、3、4時間歩くごとにあるような分布でした。そこでは、ラウンドトリップを仕組みました。ミニマムな荷物を持って、馬に積んで、ひとつずつ村を訪ねていきました。朝出ると、11時くらいに目的の村に着く。そこで3時間くらい座り込んで、これからのスケジュールだとかその村についてだーっと聞くわけですね。そのときはちょうど冬で、これから焼畑の火入れがあったり、所によっては村ごと移動するという時期でしたから、そういう予定のある村がないか調べていきました。3時ごろに仕事が終わると、自分でご飯をつくって、村の一角を借りて寝て、次の朝またごはん作って、荷物をつんで、次の村へ。これ、すっごい疲れるわけですよ。カルリのところでも、同じことをやらなきゃいけないと思ってたわけです。

ところがバックに会ったおかげで、彼が俯瞰して話をしてくれたわけ。彼は1965年くらいに初めて入って、当時でもう20年が経っています。そのあいだ、2、3年に1度は戻って、研究を続けてきたわけです。彼が説明するには、こちらの村はミッションの影響がとくに強くて伝統的なものは失われたけど、こっちにはまだある、というようなことはない。どの村に行っても、だいたい同じようなもんだって。そう言われて、私はすごく安心しました。ぜんぶ歩かないでいってのがわかって。

彼はもう、そこらじゅうのすべての人たちに知られていました。彼のいる村で聞き取りをしていたら、彼が「自分は2、3日後にはほかの村に移動するから、君たちはここに住んだらどう？」って言うてくれたんです。彼が住んでいた、かつてのトレードストアでもう使われてないところに住まわせてもらうことになりました。それからその村の、彼がよく知っているおばさまとか、いろんな人に紹介してくれたりして。だから、バックの紹介によって村に入っていったので、物事がスムーズに行ったというところもあります。とてもラッキーでしたね。そういう導いてくれる人たちがいたから。

フィードバックは、後からお見せしようと思っています。同じ地域に戻っていくってことはそんなにはないんですけど、行くときは必ずフィードバックをやっています。カリマ

ンタンでも、トロブリアンドでも。ボサビでも、このときの作品も含めて、ロングハウスで上映しました。そのころ私は8ミリビデオを使っていて、8ミリビデオとプロジェクターで上映して、みんなで見てもらいました。それ以外にも、映像を見てもらうということは、ボサビではとても多用しています。なぜかという、ここではまだ教育が進んでいないから、書いたものが意味ないんですね。だから映像がとても役に立つところでした。

司会・森田： 後半を少し先取りする話になりますが、現地で上映して、そのときの反応がべつの次の作品に何か結びついたようなケースは、ありましたか？

市岡： フィードバックから何かが生まれたかってこと？うーん、あんまりないですね。後から見ていただければわかると思いますけど、ここで一番生まれたんじゃないですか？ふつうは、見て終わりですよ。

田沼： 最初にギサロの場面だけを見て、次に日常生活を見て、最後にまたギサロを見ました。最初にギサロを見たときは、なんだかある意味で、よくある民族誌フィルムという感じがしました。あんまり多くは見えていないですけど、パプアニューギニアに関するフィルムは、私には「怒っている」「泣いている」人のイメージしかないんです（笑）。あるいはマーガレット・ミードが解説している出産の映像ですが、あれも笑っているわけじゃない。そうした非日常の光景しかこれまで見たことなかったの、こうしてみると、やってみるとは全然違うけれどふつうの人たちなんだって感じがしました。ああいうふうに場所の意味づけがあるということで、ギサロを改めてみると、共感できるとたしかに感じました。

いきなり見始めたときは、ギサロの歌もなじみのないものだし、さらにオーバーラップで音楽が流れると、「ここで感動しなくちゃいけないのかな」、「でもぜんぜん感情移入できない」、という感じがしてしまう。素人ながら、たしかにあのままでは番組にはしにくいだらうなと思いました。そういう意味で、1年後に行った甲斐があったんだなと、しみじみ思いました。

でも逆に、最初に行ったときにはそうしたことに気づけなかったというのは、それまで何本も作品を作られている市岡さんなのに、いったいなぜだったんでしょう。

市岡： はじめは、とにかくギサロを撮りたい一心で行ったから、ギサロを撮ればなんざいだったわけですよ（笑）。心の余裕がなかったんです。やっぱり反芻する時間が必要じゃないですか。ばたばたしているときに反芻なんてできないのよね。

田沼： 逆にいえば、あまりに思い入れが強すぎた、本でデータがあったがためにギサロに集中してしまったということですか。

市岡： それはあるでしょうね。どこに行っても日常生活は撮るんですけど、ふつうは、その日常生活から意味が出てくるほど深くは撮りません。日常生活では、プライムタイムの番組にはならないっていう頭もありますし。

春日聡（多摩美術大学）： 少年が、魚と澱粉を火で蒸した料理をつくってそれを分配する場面が、すごく印象に残りました。先ほど先生もおっしゃったように、ワンカットで撮ったものを番組でそのまま使っていて、まさにビデオカメラならではの効果があったと感じました。番組をつくるなかで、ワンカットで撮れた、ワンカットでうまくいったなというご経験が他にもあったら教えてください。たびたびそういうことはあったのでしょうか。

市岡： すぐには思いつかないですね。撮っているときはわりあいワンカットで撮っているんですけど、やっぱり編集することが多いですね。

ワンカットは、すごく長いじゃないですか。たとえば1分10秒のカットになっちゃう。放送時間の24分30秒のなかで、1分10秒って、すごくたくさん時間をとっちゃうわけですよ。そうすると、そのまま丸ごと使うことはなかなかできなくて、やっぱりどこかで切ることが多いですね。さっきの場面は、それがいいと思ったから意図的にそのままぜんぶ残していますが、ほかにそんな長いカットはなかったですよ。

私はもともとフィルム党で、ビデオ撮影が始まった以降も長くフィルムで撮っていて、フィルムの方が好きだったりするんです。でもこのとき、ビデオでとてもよかったのは、ビデオは光量が少なくてすむんですね。ギサロの撮影のときにはバックが立ち会ったんですけど、はじめ彼が心配していたのは、ふつうのギサロはとても暗いところでやります。ロングハウスに、もちろん電気なんてないですね。コールマンランプっていう、ケロシンランプなんだけどわりと強い光を出すランプが、あの長いロングハウスに2個ぶらさがっているだけで、あとは手に持っているたいまつしか明かりがない。そういうなかで行われるものなのに、撮影となるとライトを当てるだろう。すると、雰囲気が変わってしまうんじゃないかと、彼はかなり心配していたんですね。

それで私たちは、そういうことを考慮に入れて、フロアの中央だけに光がさっと差すようにランプの羽を閉めて、人がいる両側には光がいかないようにした。両側で何かが起こったら、それはもうバッテリーライトで処理するしかないと決心して、照明計画を立てました。いずれにしても300Wしかないんだから、あの広いところを煌々と照らすことなんてできないんですけど。

それにポータブルのジェネレーターというのは、すごく音が大きくて、バタバタいうわけです。歌を撮ろうというのにそんな音が入ったら、ぶちこわしになっちゃう。できるだけ遠くに離したいんだけど、遠くに離せば離すほど、今度は電圧がドロップしちゃう。だから、せいぜい10メートルくらいしか離せない。それでできるだけ遮蔽物があるような、

へっこんだところに置いて、できるだけ音が少なくなるように苦勞して、撮影したんです。

あとでバックに聞いたんですよ。ライトのために影響があったと思いますかって。そうしたら、「いや、いつもの通りだった」って言いました。それからもっと後に、みんなに話を聞いてみると、独立記念日の式典の後にもギサロをやったりするっていうんです。それは昼間にやるのかって聞いたら、そうだって。昼間に外ですよ。「それで泣く人いるの？」って聞いたら「いる」っていうんですね。多少の影響はあるかもしれないですけど、真昼間の太陽光の下でも行われているってことを聞くと、300Wのライトをあてるくらいなんてことなかったわねって、今では思います。

司会・森田： どうもありがとうございました。それでは時間ですので、前半はここまでとします。

第2部

開発への渴望

カルリの人たちは、これまで取材した民族のなかで非常に心を惹かれる人たちで、樹海もものすごく魅力的で、何回も行きました。ただ行くのがとにかく大変で、事前の手配で忙殺されて疲れ果てちゃうんですね。そのたびにもう行くのはよそうかと思うくらいですが、行って樹海の上を飛行機で飛ぶと、ああ来てよかったと思える、そんな場所なんです。

場所も人間たちもものすごく好きだったので、番組をつくってそれで終わりという気持ちにはなりません。とくに現場にいるときに、人びとの飢餓感といったらいいのか、「自分たちだけが大樹海のなかに置き去りにされている」という気持ちを強く感じていました。パプアニューギニアは、地域によってはそれなりに開発されて、今ふうの文明が入って、貨幣経済も浸透して、いろいろな物が手に入るという生活をしている人もたくさんいるわけです。ボサビの彼らは隔絶されているけど、そういうところがあることはわかっています。ときどき外から入ってきた人に聞くこともある。そうした話をきくたびに、「自分たちだけが取り残されている」という気持ちもものすごく強くなる。

じゃあ、どうしてほしいと思っているかというと、「伐採企業に来てほしい」という話にすぐになっちゃうんです。伐採企業が来れば、材木を運び出すために、まず林道ができる。林道ができれば、自分たちもそれを利用して、最寄りの町と行き来することができる。今は、屈強な男がマラリアのある森のなかで二晩くらいを過ごして、歩き続けられない限り、町に行くことができません。ほとんどの人が、樹海のなかで一生を過ごす状態になっています。

だから、とにかく林道がほしい。道路を利用して移動できるし、物資も入ってくる。企業が伐採を始めれば、自分たちも雇ってもらえるかもしれない。企業は、伐採権を入手するためにいいことをたくさん言います。たとえば、診療所をつくってあげるといふ。診療所ができれば、女の人がそこで子どもを産める。出産には事故が多いので、安全にできることは大きなメリットなんです。企業は、あれもこれもつくってあげると誘うようなことを言うし、お金がたくさん落ちるような印象を振りまくわけです。だから、「伐採企業に来てほしい」ということになっちゃう。

でも私は、カリマンタンのダヤック族とか、同じパプアニューギニアのニューブリテン島とかマダンとか、すでに森を売った人たちのところにいくつも行きましたけれど、売って本当によくなったところは見たことがない。生活の基盤を失って、水もわるくなって、どちらかというと前よりわるくなっているんじゃないか。仮に林道ができて、伐採企業がプロジェクトを終えて撤退すると、もう道の補修なんてやりません。すると、道路はすぐに使い物にならなくなる。あくまでもメンテナンスをやっているから道路は使えるのであって、そうじゃないと草や木が生えて、すぐに元に戻ってしまうことを、彼らはなかなか

か理解できないわけですね。

そうしたことを考えると、伐採企業が来ることがボサビのためにいいことだとは思えない。だけど、そういうことを説教してもだめなんですね。「森を売らない方がいいよ」なんていくら言ったって、それを実感してないわけですから、効果はないわけです。

じゃあいったい自分に何ができるかなって思いました。今までメディアで働いてきて、インフォメーションをやっているわけで、自分にできるのはそれだ。この人たちに実態を知ってもらって、そのうえでもう1回考えてもらおう。彼らがそれでも伐採企業に来てほしいと言うなら、それは止めることはできない。そう思いました。

それであの地域から6人のメンバーを選んで、ニューギニア国内でのリサーチトリップを組織することにしました。このリサーチトリップ自体をフォローして、撮影して、それを番組化する。番組化すれば、必要な費用を制作費から出せます。

こうして、1992年にボサビに戻りました。以前の訪問から、もう6年くらい経っていました。亡くなっている人も多くて、事情がいろいろ変わっていました。それこそ、前に作った映像のフィードバックをこのときにやりました。リサーチトリップの様子は撮影して、番組のはじめに使いました。まずはフィードバックの場面を見ていただきます。

【映像上映】 「極楽鳥の聖域を守れ」（1983年制作）より。

ボサビを再訪した市岡と、人々との再会。かつて制作したギサロの番組を、ロングハウスにて上映する。

リサーチトリップのメンバーの顔ぶれですが、まずは地域の行政官です。これはボサビの外から来ている人ですけど、やっぱりこういう人には重きを置いておかないと、いろんなことがやりにくくなる。それから、救護所で看護師補をやっている男の人と、青年団の団長というかな。それに、さっきのナメヤという、かつてギサロの名歌手で、牧師補をやっている人。さらにもうひとは、最初に訪れた当時15歳くらいで、私たちのそばに来て、いろんなことを細やかにお世話してくれた青年。彼は、私たちから何かを学ぼうという気持ちがとても強かったんです。そのときに20歳くらいになっていました。女性もいた方がいいと思って、さらに1人を入れたんですけど、これはあまり有効にははたらきませんでした。

リサーチトリップでは、伐採企業を入れた結果どうなるのか、じゃあ他にどんな方法があるのかという、ふたつの側面からいろいろ見ていきました。では、リサーチトリップの記録を少し見てもらいます。

【映像上映】 リサーチトリップの一行が、伐採地を回る。

移動式製材機の活用のように、IFTA (Insect farming and trading agency) による昆虫の買い取りを見学。

村に帰り、メンバーがリサーチトリップの成果を、上映映像に合わせて説明する。

リサーチトリップの一部をお見せしました。メンバーが見てきたものを、山に戻って地元の人たちに解説することで、外の世界で起こっていること、とくに伐採企業に森を売るとどうなるかということ、できるだけ多くの人にわかってもらいたいと思いました。

同時に、「バック」シーフェリンとアイディアの交換をしました。どういう方法がより適しているのか、ひとつひとつの案の実現可能性を検討してみました。まず、可能性としてエコツーリズムがある。ご覧いただいたように、鳥がたくさんいて、水がきれいなすばらしい滝があって、食べ物がけっこう豊富でおいしくて、人々の気立てがいい。そういう条件は、エコツーリズムにあっていると思いました。けれどもこれは、彼も私も、あまり効果がないだろうという結論になりました。その理由は、まず恩恵に浴する人が少なすぎる。宿舎をつくるとして、宿舎になる土地をもっている地主と、そこで働くスタッフ、あとはお客さんをツアーに案内する案内人、そうした人たちは利益を得るでしょう。だけど、コミュニティ全体には利益を及ぼさない。一部の人だけがいい目にあって、他は何にもないということになると、やっぱりねたみが起きやすくなって、事業自体の足を引っ張ることが起きかねない。ポジティブな部分が少ないのに、ネガティブなことはいっぱい起こりそうで、これはやめた方がいいということになりました。

移動式製材機の導入は、まず初期投資の金額が大きすぎる。それに、機械がうまく動いているうちはいいですが、扱いも慣れていないし、きつと故障しますよね。そうすると、修理する人を山の下から呼んできて、費用をかけて修理しないとイケない。そんなことはできないだろうから、壊れたらそのままになるだろう。第一、仮に木を切っても、現地で使う木材は得られても、余剰を外に売ることがあの山のなかではできないでしょう。だからこれは、ほとんど意味がないと思いました。

それから、カルダモンの栽培という選択肢がありました。熱帯の香辛料です。バックが栽培している人を見たことがあって、よく実っていたそうで、可能性があるかもということになりました。コーヒーだと値段がすごく安いから、あそこから飛行機に載せて運ぶ意味がない。けれどカルダモンは値段がいいので、モノになるかなと考えました。そこでJICAの熱帯作物の専門家に相談してみると、「生育はするだろう」と。けれども、収穫したあとが問題です。あそこに機械があって加工ができればいいけど、それが無い。とりあえず乾燥しないとイケないから、天日で乾燥する。でも、少しでも雨に当たるとだめになってしまう。「雨に当たらないように、ずっと見張ることが出来る人たちですか」と聞かれて、私はそれはできないと思いました。たぶん、干してそのまま畑なんかに行っちゃって、その間に雨がふってきて、それでだめになっちゃうでしょう。これら3つのアイディアはそれぞれネガティブな側面があって、あまり似つかわしくないと思ったんですね。

最終的には、蝶々やそのほかの昆虫を売るとするのが一番いいんじゃないか。森を保全

したまま、そこから地元の人たちがなにがしかの利益が得られるというこのプログラムが、一番いいんじゃないかなと思いました。なぜかというと、まず研修グループが、実際に現金化できる現場を見たわけですから、説得力がある。機械や設備の初期投資がいらぬ。せいぜい捕虫網とかその程度です。それから、まったくの個人作業なので、組織化して何かをやらなきゃいけないということがない。ああいうところで、グループで何かをするのは、それ自体がとても難しいですよ。これならば老若男女誰でもできますし、ある程度の年齢であれば子どもでもできる。それから、物が非常に軽い。あそこは何を送るにしても、必ず飛行機に載せないといけないので、輸送費が安いというのはとてもいいと思いました。それに昆虫というのは、森がある限りほとんど無尽蔵に湧いて出てくるようなものです。種が絶滅するというはまずありません。持続可能な最たるもので、続けてやってもマイナスはない。こういう事情で、このプログラムが一番いいんじゃないかと思いました。

1995年、このときは私は1人でボサビ山にいて、まず根回しをしました。いきなり乗り込んでやりましょうなんて言っても、反対があつてつぶれちゃうでしょう。ですから、まず小当たりに、影響力のある人たちみんなに説明して、少なくとも反対はされないという状況までもっていきました。

そのうえで次の年に、実際にプロジェクトを始めました。私は実は昆虫はだいきらいで、さわりたくないし、指導もできないので、昆虫写真家の鈴木知之さんに協力してもらうことにしました。ニューギニアの南の突き出したところに、アレキサンドラという世界でいちばん大きい蝶々がありますが、彼は青年海外協力隊でそれを保護する日本のプロジェクトに関わった経験がありました。ただそのプロジェクトは、非常に広い範囲に高いフェンスを張り巡らせて、上もカバーして、そこにアレキサンドラが食べる植草を植えて、そのなかで殖やすというプロジェクトだったそうです。でも彼に言わせると、そんなことをしてもあまり効果はない。アレキサンドラが本来生息している森自体を守ることのほうが、ずっと大事なはずだ。ところがその森は、パームオイルのプランテーションにするためにどんどん切られちゃっている。そんな柵のなかでやっても意味がないというのが、彼の結論だったんです。だから彼は、私たちのアイディアの方にむしろ希望があると思ったんでしょう。それで協力してくれることになりました。

昼間は、関心のある人を彼が森に連れていって、どういうふうに蝶々を捕って、それをどう扱って、最後に送り出すかまでを教える。完全な形でないとエージェンシーが買いませんから、扱い方がけっこう難しいわけです。

夜になると私が、環境意識向上プログラムと称して、地元の人に、樹海を売って伐採企業を導入するとどうなるのかをわかってもらおうと、それまでに自分がつくった番組を見てもらいました。たとえばカリマンタンのダヤック族の土地の伐採権を、インドネシア政府が勝手に伐採企業に振り分けてしまった。そのために、何百年ものあいだ畑をつくったり森から木を伐り出したりしていた先住民が非常に追い詰められて、苦しい思いをしてい

るという番組を作ったことがありました。そういう番組や、伐採企業が入ったマダンの映像を、夜になるとロングハウスで上映しました。一般の人にとってそれは、教育的な映像というよりは、なにか映画を見るような気分で楽しみに見に来ているところがありました。だけど、そのいくらかでもみんなの気持ちに浸透していけばいいと思ってやっていました。

では、私がカメラを回したへたくそな映像ですが、少しそのようすを見ていただきたいと思います。

【映像】 環境意識向上および昆虫プログラム

ところが、1996年の最初のプロジェクトは、あまり大掛かりにできませんでした。というのは、運がわるかった。私にとっては運がよかったということでしょうけれど、飛行機が墜落しちゃったんです。私たちが乗ってボサビに着いて、パイロットと手を振って別れたその飛行機が、夕方に県庁所在地の立派な空港でどうしてだか墜落しちゃったんです。乗っていた人たちは全員死んでしまいました。飛行機には、私たちが下りたのと入れ替わりに、ボサビの人たち8人が乗っていました。そのなかには、リサーチトリップと一緒にいった、救護所の看護師補の男性も入っていました。「何日に帰ってくるから、じゃあまたね」って別れたその人も亡くなっちゃったわけです。彼はとても見どころのある人だと思っていたし、おだやかで、リーダーシップもあって、プロジェクトをやるときにはぜひ力になってほしいと思ってたんですね。だから、とても気落ちがしました。

ボサビの山から行った人が8人も亡くなるなんて、前代未聞のことです。山中が喪に服するみたいな感じになりました。そうした状況だから、こっちがプロジェクトをやりたいと思っても、堂々と大げさにはできないわけです。それでもせっかく行ったわけですから、ギサロを撮影させてもらった仲間のところに住み込んで、非常にほそぼそとやりました。「歌舞音曲は禁止」ということで、夜の上映会もそのひとつと数えられたのでしょう。派手なことはやってはいけないということで、まったくできませんでした。

結局のところ、プログラムに関心を示してきた人は思ったより少なかったんですね。まず大人は、ほとんど関心を示さなかった。集まってきたのは少年から青年くらいの人たちで、わりあい熱心にやったのは、ハイスクールを中退して村に戻ってきていた子たちでした。山の中には、小学6年生まではコミュニティ・スクールがありますが、その次の4年制のハイスクールに行くためには、山を下りて、県庁所在地かその近隣の町のハイスクールに行かなきゃならない。そこに行ける人は限られているし、行ったにしても長くは続かないんです。親のお金が続かなくなっちゃう。授業料は大したことはないんですが、寮に住んだら寮費もいるし、町にいれば靴もはかなきゃならないし、シャツもパンツもいる。いちばん大きいのは、村とのあいだの飛行機での往復ですね。長い休暇になれば帰ってきますし、そういうことにけっこうお金がかかるわけです。だいたい1年か2年は親が出してやるんだけど、それ以上は続かなくなって中退して、村に戻ってくる。そういう子た

ちがたくさんいて、彼らがわりと関心をもってくれて、鈴木さんについてよく学びました。

なんで大人たちが関心がないかっていうと、それが現金化されるにしても、あまりにも、手に入るお金が少なすぎる。一方で、彼らにアプローチしてきている材木の伐採会社からは、何十万とか、100万キナって金額を提示されるわけです。

彼らはその価値をきちんと把握しているかどうかはわからない。だってまだ教育も受けていないし、算数もできない。でも、大きな大きなお金だってことはわかるんですね。一生懸命やっても100キナじゃ、どうかしらってなっちゃうのでしょう。それでも実際は、先ほど上映したなかでマダンの人たちが言っていました、半年に1回、6千円程度が配られるくらいのことです。そのうえ、ニューギニアってすごく平等社会だから、子供にいたるまでメンバーみんなにそれを配るわけですよ。すると、1人あたり数百円になっちゃう。森を売って、6ヶ月に1回数百円もらってもしょうがないじゃないかって私は思うけど、そういう計算が彼らにはきちんとできないわけです。まだそういう目にあってないからわからない。そういうことに比べれば、100キナだって御の字だと私は思うんですね。ところが、大人はそういうものにはぜんぜん関心を持ってない。

次々に障害が出てきましたが、はじめから問題になったことは、物がなくてということでした。たとえば日本だったら、蝶々をパラフィンなんかで作った三角紙に包みますね。そういうものを、はじめのうちは少しは持っていきましたが、それだけじゃ足りないわけです。だから新聞紙で折って三角紙にしようって教えたんだけど、新聞紙だって、山の下から持ってこないといけないわけです。紙に包んだら、今度は乾燥しなきゃならない。ちょっとした台をつくって、太陽の下で乾燥させます。ですが台に置いておくと、まあ、ありとあらゆる虫が来てそれを食うんですね。ときにはネズミも来るし、ゴキブリも来る。だから飛んでくる虫を追い払わないといけない。下からはアリが上がってくるから、空き缶に水を入れて、台の4つの足をそこにつけておくとか、いろいろ考えてやるんですけど、うまくいなくてずいぶん食われちゃうんですね。ある程度まで乾くと、今度は保管しなきゃならない。本当だったら、空き缶があるといちばんいい。ひとりひとつずつでも持っていれば、保管するにはかなり有利ですよ。でも缶なんか、ないわけです。缶に入れるにしても、本当はナフタリンとか虫よけの薬を入れたほうがいいけれど、それもない。だから私たちは、下から行くときには、ナフタリンはもちろんある程度揃えましたし、新聞紙を一生懸命集めて束にして持っていきました。東京にいるときも、紅茶やクッキーの缶の類はぜんぜん捨てずにとっておきました。それをなんと、東京からあの山のなかまで持っていくのね（笑）。

蝶々は最終的には、IFTA (Insect farming and trading agency) というエージェンシーに送るんですけど、送るときにはやっぱり箱がないと送れませんね。でも箱もない。さらにそれを送るにも、郵便局がないから、パイロットか、たまたま外に出て行く人に頼んで、郵便局で切手を貼って出してくださいって頼む。そこまでできると、今度はIFTAから、小切手が返ってきます。IFTAはきちんとやっていたから、ちゃんと点検して、完全な形

のものはぜんぶ、種類によって決まっている値段のぶんの小切手を送ってきてくれる。ところが小切手を受け取っても、現金化する銀行がもちろんない。だからそれも、山から出かけて行く人に、やってきてくださいって頼む。こんなふうに、私だったらいやになっちゃうと思うような障害がたくさんあるわけです。

そのころによく言われました。「君たちはここにきて、3週間とか4週間とか教えてくれるのじゃだめだ。誰か1人を専門に送ってくれ。その人がここに1年くらいいて、継続して教えてほしい。それからその人が、ここで蝶々を買い取ってくれ。」そうすると、彼らにとってはただちにお金になるわけです。「そうしないとだめだ」って。

ごもつともな話だと思いましたが、そんなことは不可能なんです。1年か2年誰かが駐在するとなると、青年海外協力隊かなと思います。でも協力隊の隊員を送る場所には、いろいろ条件があるんですね。まず受け入れ側が、住居を提供しなくちゃいけない。それから、車でも飛行機でもいいですけど、定期的な交通機関がなくちゃいけない。コンスタントにコミュニケーションもできなくちゃいけない。当時のあそこには、それらが何にもありませんでした。小屋くらいは彼らが作ってくれたかもしれないけど、とにかくトランスポーターが一番の問題で、定期的にはないんです。それから、今なら携帯電話の高級なもので外と連絡できるんでしょうけど、当時は無線機でもないかぎり外と連絡がとれない。そうすると協力隊員を送ってもよろしいという場所にあたらないうんです。

でも考えてみると、協力隊員が行って、本当にお役に立って感謝されるような場所ってというのは、だいたいああいうところなんですね。本当はそうしたところに行くのが一番いいんだし、志願していく人もそういうところで役に立ちたいって人がいっぱいいるわけです。でも現実に配置されているところをみると、ラバウルとか、メンディとか、マウントハーゲンとか、みんな県庁所在地ばかり。そうしたところじゃないと条件に合わないからでしょうね。だから、専門家を長く滞在させることはできない。それから、「お前たちがここで買い取ってくれ」というけど、これもぜったいにできない。なぜかという、IFTAと、ワウ・エコロジー・インスティテュートだけが、海外との取引のライセンスを持っています。一介の日本人がそこで買い取ってしまったら、法律違反になっちゃう。だからそれもできない。

いろいろと問題がありました。それでも、何回やったかな。まず、飛行機が落ちたときの1996年。その次は1998年に行って、40日くらい滞在しました。はじめにやった場所とは別の、西の集落のふたつに定着して、やりました。その次は2001年に、出かけはしたんです。ポートモレスビーからエア・ニューギニーの飛行機で、メンディというところまで行きます。ここからセスナに乗るわけです。ところがポートモレスビーで、ちゃんとボーディングカードをもらって、荷物も積まれているのに、ゲートで止められちゃった。なぜかという、急に大きい機体から小さい機体に替えてしまったので、10人くらいがあぶれて、「あなたたち乗れません」って取り残されちゃったのね。メンディに着いたらボサビへすぐに飛行機で飛べるように、すごく大変なのに東京でぜんぶアレンジして行きました。

それがこの調子ですから、次のことをやるってことがもうできないんですね。当時は、日本からポートモレスビーに2週間に1便しか飛んでませんでした。ほんとうだったら、到着後にすぐにボサビに行って、1週間弱プロジェクトをやって、2週間後の飛行機で帰国するつもりでしたが、もうぜんぶ狂っちゃったわけです。それでもう私、帰ってこようと思ったんです。そしたらなんと、自分たちの荷物が飛行機と一緒に引っっちゃったじゃないですか。これがいくら掛け合っても、一向に戻ってこないんですよ。実にばかばかしいことに、毎日飛行場に行って、荷物を取り戻すまでに1週間かかりました。こうして、2001年はもう何もできませんでした。

その次の年、2002年にもう1回行きました。青年たちはもうある程度わかっているのに、このときは子どもたちに教えようと思っていました。小学校の教室に、先生に相談してもらって、そこでやり方を教えて環境意識向上の上映会も行いました。

そのころになると、新しい問題がまた出てきました。まず、定期便が撤退してしまいました。90年代の終わりには、国政選挙をめぐる部族対立が激しくなって、サザンハイランド州も騒擾状態になってしまいました。メンディの一番大きな飛行場が閉鎖されて、定期便が飛ばなくなってしまい、ボサビにはもう行けなくなりました。

飛行機が来ませんから、この時期に郵便事情もかなりわるくなったんだと思います。2002年に行ったときは、私たちの問題ではないですけど、みんなが文句たらたらで。ようするに「IFTA に送っているのに、小切手が帰ってこない」「どうしてくれる」って言うんですね。私が思うに、IFTA はちゃんと事務をやっていたと思います。きっと郵便の問題だろうと思いました。だけど郵便事業をよくするなんて、われわれの手に負えることじゃないですよ。

こうして次々に問題が出てきて、それがみんな、一日本人ができるようなことではないので、こっちも疲れ果ててしまったんですね。このあたりでプロジェクトを中断することになりました。とにかく、ボサビに行けないんですから。「ヘリをチャーターして来てくれよ」と言うんですけど、片道18万円もかかるのに、個人がやっているプロジェクトでできるわけじゃないじゃないですか。そんなことで、申し訳ないけど中断したままになっています。その後の話も長いんですけど、詳しくは朝倉世界地理講座の『オセアニア』に書きましたので、もしチャンスがあったらお読みになってください⁴。

【質疑応答】

⁴ 市岡康子 2010 「映像制作からボランティアへ——パプアニューギニアにおけるコミュニティ開発を考える」、熊谷圭知・片山一道編、『オセアニア』（朝倉世界地理講座第15巻）：459-469。

司会（森田良成 大阪大学）：ありがとうございます。それでは、質問や感想をお願いします。

川瀬慈（国立民族学博物館）：荷物は無事に帰ってきたのですか？

市岡：1週間目に無事に帰ってきました（笑）。そのときは、日本を出発するときからなんだかおかしかったんです。向こうの人にあげるもの、空き缶もあるし、プロジェクターもあるし、7つくらい荷物があつたんです。そのころは関空からエアニューギニーが飛んでいたんで、そうした荷物を羽田から関空まで国内線で運ぶつもりで、羽田にタクシーで向かいました。そうしたらお盆の時期で、「1年に2回くらいそんなことがある」ってタクシーの運転手さんが言っていましたけど、もうずーっと渋滞していて高速道路から空港のなかに入れないんですよ。空港のなかで自動車がいっぱいになってしまって、それでもう入れなくて国内線に間に合わないと。それじゃあ新幹線で行こうと思って、戻ったんですね。7つの荷物を新幹線で運ぶわけにもいかないから、個人タクシーの運転手さんに3つくらい預かってもらえるように頼んで、持てるものだけを持って、やっと飛行機に乗ったわけです。

そうしてやっとポートモレスビーに行ったら、そんな感じでしょ。私ねえ、これは神様が「今回は行くな」って言ってるんじゃないかと思ったわけね（笑）。あまりにもトラブルばかり続くから。そんなときは無理して行かないほうがいいんじゃないかと思いました。向こうの飛行機だって、前に落ちていますからあぶないし。それでもう行くのはよそうと思ったわけですね。

川瀬：このお話以外でも、ほかのプロジェクトで、「神様がストップをかける」といった感じがして、自分が慎重に判断してとりやめるような経験はありましたか。

市岡：あつたかなあ（笑）。次々に、不吉というか、よくないことが起こるってことはときどきありますけどね。でも番組制作の場合は、そんなに簡単にあきらめられないですよ。それでもやらなきゃってことがあるから。このプロジェクトは自分でやっていることだからいいですけど。

川瀬：テレビ番組をつくるとなると、撮るか撮らないかということになりますが、ドキュメンタリー映画では、そうしたハプニングや、撮ろうと思っていた相手が不在であったといった事実と直面した場合に、たとえば「不在を撮る」であるとか、「撮れない自分を撮る」というセルフ・リフレクシブに撮るという方法論が、最近けっこうあります。そういう方向を考えられたりはされますか。

市岡： それはすごい高級なやり方だと思います。うちのボスの牛山さんがしょっちゅう言っていましたよ。撮影から帰ってくると、飲み屋なんかでいろいろ報告しますね。報告といっても、書いたものできっちりやるわけじゃないから、雑談的にやるわけですね。そういうときに聞いた話のほうが、できあがった番組よりぜんぜん面白いって（笑）。「そういうことを番組に取り込めないのかねえ」って、よく言っていましたね。でもわたしは、それは第2のカメラがないと、カメラ1台ではできないと思います。2台目のカメラマンがディレクター的に取材チームを撮ればできるでしょう。私自身が撮影対象を撮りながら自分をどう見せるか演出するのは難しいし、かえって不自然な作りものになるでしょう。

川瀬： もちろん、自分の安易な描写に帰着してしまうと、ただ自分を撮るだけのものになってしまいます。大きな議論・物語に突き抜けていければいいですけど、そこが難しいようです。

田沼幸子（大阪大学）： リサーチトリップの人たちが亡くなってしまったというのは衝撃的な話でしたが、その出来事は村の人たちにどんなとらえられ方をしたのでしょうか。それこそ、「神様が私に行くなと言った」といった話のような感じだったのか、それともただの事故として認識されたのでしょうか。

市岡： その前のリサーチトリップからは3年くらいあいだが空いていて、それと結びつけてどうこうとは考えなかったみたいです。ただの事故として認識されていたんだろうと思います。

金セツピョル（総合研究大学院大学）： 1995年から開始された活動は、番組化されていないんですね。

市岡： ボランティア活動については、番組化していません。さきほどお見せした、自分で撮った映像しかありません。

金： 第1部で拝見したギサロと、今回の映像とでは、撮影者とボサビの人たちとの関係がずいぶん違うと思います。ギサロでの撮影者は、ただその儀礼を見せてもらうというような立場でした。でもここでは、生活に直接関わるように立場になっていたと思います。

そうなったときに、映像を撮るうえで何か変わったのでしょうか。撮影するときに、関係性が違うことによって、これまでとは違う撮影の過程があったり、違った映像になったりということはあるのでしょうか。

市岡： もしやったらという仮定の話ですが、ボランティア活動について番組にするつも

りで撮影するとなると、自分が相手と関わって行動しているので、自分自身を撮ることになるわけですね。自分自身を撮るのは、相手をいわゆる「客観的に」撮るのはぜんぜん違う問題だと思うので、むずかしいですよ。もし、カメラマンがいたとしても。

金： 95年以降についての番組ができれば、ぜひ見てみたいと思いました。

市岡： でも、愚痴を言ってるばかりの話になるわよ（笑）。むこうの人たちが、すごい愚痴ばかり言うてるから。大人はプロジェクトに参加していないくせに、やって来ては、自分たちが取り残されていることの愚痴のたけを述べていくわけですよ。こっちは気が滅入ったりするんですけど、でも聞くっていうのも、もしかしたらひとつの癒しになっているかもしれないから、聞きますけれどね。

司会・森田： 感想ですが、今日は第1部と第2部とで長い時間の講演をお願いしましたが、それぞれが興味深いお話しでした。さらに、これをいっぺんに見ることができたのが、おもしろかったと思います。

前半でギサロを見て、映像のなかの説明に促されて、火傷に耐えて、悲しみを交換するという不思議な姿を理解しようと、こちらも彼らに寄り添おうとしました。それが後半に入ってその後の彼らの様子を見ると、ギサロの名手があっさりやめてしまっていたりして、こちらが近づいていたつもりが、「あれ、違ったのか」という感覚になって。とらえようとしていたはずの現実が、いかにすり抜けていくのかということ、まざまざと見せつけられたような気がしました。

ひとつ質問ですが、後半の話は、ほとんどが番組化されていないもので、それまでのお仕事の枠を完全に超えた活動だったと思います。費用も時間も労力も膨大なものがあったと思いますが、そこまでのことに突き動かされた動機はどういうものであったのか、お聞かせください。

市岡： 95年以降は、私は少しひまになったというのが、非常に大きいですね。シリーズ番組につかまっていなかったから。「すばらしい世界旅行」は終わっちゃって、それは悲しいことですが、そのおかげである程度は自分の自由な時間が作れるようになりました。

それからギサロは、自分の制作の歴史のなかで、わりあい終わりのほうに作った作品でした。そこで、非常に強い、平たい言葉でいえば感動を受けた人たちがいました。伝統的な儀礼とか、彼らの生活のありかたとか、私はすべてとても美しいとは思う。けれどやっぱり、彼らの飢餓感もすごくわかる。すごく、混乱したような気分になりますよね。

そうしたことは、このボサビだけじゃなくて、今まで仕事をしたところでずーっと感じていたんですよ。でも感じたからといって、ただちにアクションをおこすような状況にはなかった。そもそも忙しくて、そんなことはできなかった。でも、トロブリアンドでも

感じたし、ダヤック族のところでも感じたし、タイの山奥でも感じたし、ずーっと少しずつ感じていたものが、ここでなにか最後にぱっと出てきたっていうのかな。

1995年にまずとにかくやってみようと思ったのは、大同生命地域研究特別賞というのを私がいただいたんですね。そしたらなんと副賞で、100万円がついたの。それでこのお金は、私が個人的に使うものじゃないって思ったわけです。それでじゃあ、自分の気持ちにもやもやとひっかかっていた部分があって、すきな人たちがいて、すばらしい樹海も守りたいしっていうところに、これを注ごうかなあと。それで第一歩を踏み出したんです。だから、大同生命の賞金はかなり大きかったと思います。

小林（龍谷大学）： 後半の昆虫プログラムのお話を伺っていて、徳島県の上勝町で活発に行われている「葉っぱビジネス」とシンクロするように思いました。あれも、葉っぱだからこそ、高齢の方も関わりやすいし、資源も無尽蔵にあるという話だと思います。あちらのほうはすごく成功しているそうですが、ボサビでのプロジェクトはインセンティブがなくて、儲かっていない。むずかしいのだろうと思いますが、でも非常におもしろいアイデアだなと思いました。上勝町ではコミュニティリーダーがいらっしやって、その人が引っ張っているそうです。飛行機事故もあり、リーダーが不在であったということでしたけど、ボサビでもどうにかうまくいかないものかなあと思いながら、お話を伺いました。

95年以降は、映像を使って彼らに関わるということは、もうやめたということでしょうか。

市岡： 映写して人々の意識を変えようってことには映像を使っていますけども、プロジェクトの成り行きを映像化することはやっていません。

小林： 私は、映像を制作することで、被写体が元気になっていったりするエンパワーメントの効果というものに関心があります。もしよかったら、ぜひそうしたことをやっていただきたいなと感じました。

市岡： もうこの年じゃ、ああいうところには行けません（笑）。そういう相乗作用が働くような映像の使い方ができれば、いいですね。

小林： 被写体の方々の現在の生活は、もし市岡先生に出会わなくて、被写体にならなかったとすれば、何か違いがあったのではと思うのですが。

市岡： いやあ、大した違いはなかったんじゃないですかね。彼らのところには、「バック」シーフェリンがずっと継続的に、外からの訪問者としてはいちばん足しげく行っています。また、彼の友達のイギリス人が、やっぱりあそこに非常に魅入られて、私がプロジェクト

をやっていたのと同じ時期かな、何回か夏に来て1人で村を回って、機械とか道具を直してあげるようなボランティア活動をやっていましたね。

やっぱり、外から来て自分たちに関わってくれる人がいることは、彼らにとってはとても、なんだか慰められるっていうのか、そうした面があるのでしょうか。そういう人がほしいわけですね。だけでもそうした人たちも、そうしょっちゅう来るわけじゃない。1回行って、次は10年後に来るようじゃ、だめなんですよ。毎年ではないにしても1年おきくらいに来て、コンスタントに関係を続けていって欲しいというのが、彼らの気持ちでしょうね。

それから、インセンティブの話がでましたね。もちろん、入ってくるお金が少ないからあまりやりたくないということはありません。ただ、シーフェリンとの手紙のやりとりで出てきたことですが、あそこは基本的には、ほんとうはお金が要らないところなのだと思います。彼が何十年も研究してきたあいだには、鶏をかなりたくさん飼って鶏肉にして売るとか、それからあその川には小さなワニがいるのですが、その養殖のようなことをして売り出すとかいったプロジェクトをやった人もあったそうです。でもそういうことは、一回まとめてぼんと出すと、あとが続かないのだそうです。いっぺん売って、ある程度のまとまったお金が入るじゃないですか。そうすると、もうそこで終わっちゃうんだと。それがあの人たちの気質であって、当面必要なお金が入りさえすれば、続けてずっと入ってこなくちゃならないという気持ちにはならないのでしょうか。

突き詰めていけば、彼らにはそんなにお金は必要ないんだということです。唯一お金が本当に欲しいのは、お嫁さんをもろうための婚資で、この時にはたしかにお金があるわけです。昔ならば、ブタの牙だとか、ブタそのものとかでよかったけど、今は現金が要ります。このときが、本当にのびきりなくお金が必要なときです。そのためにみんな、伐採現場に働きに行ってお金を貯めるわけです。ただ伐採現場に行くと、自分の家ではないから食べるものから何から全部買わなきゃならない。それに現場に行くために飛行機に乗ったりすると、お金は結局あまり残らない。ある青年が、「伐採現場での仕事は、お金があまり残らないのに非常に重労働で、病気になる可能性もある。だから蝶プロジェクトがほんとにお金になるんだったら、これの方がいいね」って言ってくれました。じゃあ真剣になってやるかという、それはまた別の話なんですけれど。

田沼幸子（大阪大学）： 最終的にあの人たちは、森を売り渡さなかったのですか？ そうならば、彼らの生活は、市岡先生との出会いによって大きく変わったということだと思います。

市岡： 私もあれから、ずっとはフォローしてないので、現時点でどうなっているかはわかりません。あの樹海が残っている一番の理由は、あまりにも山がちで、林道を作って木材を運ぼうとしても割に合わないらしいんです。だからなかなか伐採企業が侵入してこない。だけど、それでもこの3つの民族が住んでいる地域の端っこまでは、もう2000年ごろ

には伐採企業が来ていました。それがどんどん浸食してくるということは、ありうると思います。

春日聡（多摩美術大学）： クリスマンに改宗した人たちは、二度とギサロを復活させようとはしないのですか。

市岡： ギサロに出ちゃいけないんですね。牧師補をやっていたあの人は、おばあさんがとても熱心なクリスマンで、ギサロで歌ったときにも、孫である彼に「もうやるな」って強く言ったらしい。彼自身も、けっこう熱心に教会に通っていました。洗礼を受ける順番があるらしいのですが、結構いいところまで行っていたのに、あのギサロで歌ったために一気に下がってしまった。それをおばあさんが、すごく怒ったらしいんです。それで改心して、キリスト教の方に行っちゃったんです。

みなさんには区別がつかないかもしれないけど、ギサロでとても目につくのは、若者たちは参加しているけれど、大人たちはいないということです。大人はみんな、クリスマンなわけです。大人でも火傷の跡のある人が何人もいますけど、その人たちにしても、見にも来ません。

今でも独立記念日なんかにはやっているかもしれませんが、いったんまともなクリスマンになると、もう全然参加しませんね。やっぱりやっちゃいけないってすごく言われているんだと思います。

司会・森田： そうした大人たちに反発する若者たちが、ギサロをやったということですか？

市岡： 当時の県会議員のハリ・カレさんに影響された部分が多いでしょうね。彼が、若者を使ってまたやろうとした部分があると思います。

司会・森田： それでは、だいぶ長い時間になりましたが、ここで終わりにしたいと思います。市岡先生、どうもありがとうございました。